

JAPANESE CULTURAL CENTER OF HAWAI'I
ORAL HISTORY INTERVIEW

with

Reverend Shoten Matsubayashi (SM)

September 12, 1993

At the residence of Rev. Yoshiaki Fujitani

By Atsuko Hasegawa (AH)

Transcriber's note: This transcript was reconstructed from an earlier transcript written in Japanese rōmaji, which was converted here to Japanese characters (kanji, hiragana, and katakana). The interview was conducted in Japanese with a few English words. Double parentheses ((?)) mark inaudible or unclear sentences or words. Brackets [] have been added for clarification purposes.

AH: まあ、先生、今日は、ようこそね、遠い所にいらっしやいました。今日は、先生とお話するんでね、ちょっと緊張していましたのよ。でも、どうぞ、昔のこと、もう、ざっくばらんに、話して聞かせて下さい。先生は、何時頃、あの、開教師さんとして、何年頃、来られたんですか？

SM: 私は、1936年に、ハワイに開教師として来たんですけども、朝鮮の龍山 [Ryuzan] の本願寺からハワイの開教師として、転任を命ずるといふ辞令のもとに来たわけですね。まあ、大体、その、私が、日本から、ハワイに開教師として来ました当時は、まあ、あの、無論、船で来たんですけども、本山から、三百円の補充金を貰って、そして、来るのには、船の普通の三等客でなしに、特等の二等に乗って来なければいけないということで、まあ、大体、二百ドル位の船賃を出して、来たというように、思っておりますが、まあ、そういうことで、ハワイに、船で、まあ、一週間かかって、まあ、一等船客というようなことで、ハワイに来たんです。で、まあ、私の過去の、その生まれてからのことを、一寸、最初に申しておきたいことは、私は、小さい時に、小学校を卒業して、十三の年に、あの、今、考えてみて、どうしてそのようになったかということとは、全然、その、記憶に無いんですけども、あの、小学校を六年卒業して、高等科二年の、その二カ年を、西楽寺 [Sairakuji] というお寺に小僧にやられて、あの、まあ、小さい時に育ち、どうして、私が、そういう、他所の寺に、小学校を卒業して、十三の年で、そういうお寺の小僧にやられたかということとは、記憶に無いんですけども、それほど悪い子供ではなかったと思いますけど、まあ、まあ、そういう

ことで、その、それが、今、考えてみるというと、私の人生に、大きな plus となっておるということを、しみじみ、今頃、考えるわけで、あります。その、西楽寺というお寺は、有名な、浅原 [Asahara] 才市 [Saichi] 同行 [dogyo] のお参りしておったお寺なんで、安楽寺 [Anrakuji] の門徒ですけれども、西楽寺にも、一年の何回か勤まる、法要の時に、必ず、才市さんは、お寺にお参りして、で、まあ、大きな男ではない、小さいお爺さんでしたけれども、莫産 [goza] の前に座って、そうして、まあ、聴聞しておりました。でも、私、十三ですから、子供とでも、その才市同行が、“小僧さん、おらが、喚鐘 [kansho] を叩いてやる” こういうふうに言って、それで、喚鐘を叩いてくれたことを思い出して、まあ、その当時は、才市さんは、そんなに世間に知られた人でなかったんですけれども、兎に角、いま、考えてみるというと、肩衣を掛けて、聴聞をして、そして、まあ、あの、そういうふうにお参りしておった姿を、私、記憶しております。それで、まあ、才市さんの家にも、あの、奥さんの使いで行って、才市さんの家に、戸を開けて入ると、まあ、そういうことで、その、奥さんからの、ことづかった物を渡すと、才市さんは、“ありがとう” と言い、下駄をつっかけたお参りした姿も、はっきりと覚えております。まあ、その、才市さんの 幽勝 [yusho] の時に、私が、西楽寺というお寺に行って、まあ、そういうことで、今、有名になった才市さんのことを、思い出すとすると、大変懐かしい思いがするわけです。それが、大正の十三年から十五年まで、二カ年ほど、西楽寺というお寺に... そして、まあ、高等科二年を済まして、その当時は、その、日本の中学程度の、学校で、あの、農業学校、商業学校、工業学校というのは、高等科二年を卒業して、その、学校に、職業的な学校に行くような時代でしたから、まあ、田舎のことですから、中学も、その、島根県に、2つか3つしかないんですから、たいへんな時代で、寺から通うことの出来るのを、学校に行って、まあ、十八の時に、一応、その、中学卒業と同じ資格の学歴を持ったので、それから、中仏に入って、、、中央仏教学院に行って、宗乗の勉強をしたということで、、、二十歳の時には、教士という、まあ、一応、僧侶としての、一番下の資格をとりましたので、台湾開教師の開教法人という辞令を貰って、台湾開教師に、三年ほど参りました。その、三カ年の間に、私の仕事は、日曜学校の子ども達が、百人位集まってくる日曜学校の経営、まあ、それを任されておりましたから、手伝ってくれる学生を、何人かを使って、まあ、そういうふうで、その日曜、日曜に、この子どもたちと、お寺で、仏様を拝むということが、私の主な仕事でした。それで、月に二度ほど、主任開教師、その主任開教師というのが、ハワイの総長となって来られた、五代目の、口羽 [Kuchiba] 義教[Gikyō] 師が、開教師でありました。まあ、そういうことで、三カ年ほど台湾におりまして、台湾開教師の開教法人の仕事で済まして、ちょっと、まあ、一年間ほど、勉強するお金ができましたので、ハワ

イに出ないで、その、台湾から、あの、京都に行って、京都で、勉強をしたんであります。布教研究所という所がありましたので、そこで、勉強して、こんどは、朝鮮の開教区の龍山本願寺駐在という辞令を貰って、龍山に参りまして、龍山で一年半ほど、、、それから、龍山の本願寺から、ハワイの開教師として、1936年の8月に、24歳の若さで来たわけであります。まあ、そういうことで、来ると直ぐに、Wailukuの本願寺に参りました。まあ、そういうことで、Wailuku本願寺の次席開教師として任命されて、Honoluluには、二週間しかおらずに、Wailukuの本願寺に参りました。まあ、そういうことで、Wailuku本願寺の主任というのが、、、その時に、まだ、独身であったんですけれども、西井 [Nishii] 布教師が、Hironori [弘典?] といっておりましたけれども、その、西井師が、主任開教師で、独身だから、“お前も、まだ独身だから、Wailukuに行け” ということ、Wailuku本願寺に参りまして、まあ、当時、Wailuku本願寺には、西井 Hironori 師が、主任で、その、西井 Hironori という主任になられた人も、まだ、若いので、当時、原田 [Harada] Gikai という先生が、Waipahu から、主任として、Wailuku に来られたんですけれども、半年位の病気で、日本へ引き揚げられて、それで、まあ、次席であった西井師を主任にしてくれという、まあ、当時、Wailuku本願寺には、熊本県の人と、それから、広島県の人との、信仰の対立があって、で、まあ、学校のほうの関係が、熊本県、それで、お寺のほうのお世話をする人が、熊本の出身であって、それで、熊本県の人が、熊本の出身である西井師を推薦して、主任にしてくれという、まあ、総長にお願いしたんだろうと思いますが、それで、若くして主任に、Wailuku本願寺の主任に、西井師がなられた。まあ、そういう関係で、Wailuku本願寺にいたんですけれども、、、

AH: じゃあ、先生は、次席で、ずっと、Wailuku にいたんですか？

SM: はい、はい、Wailuku本願寺に、次席として、三カ年ほど勤めました。

AH: ああ、三カ年？

SM: はい、その間、日本語学校の仕事を、午後はする、で、まあ、夜ですね、あの、布教に、家庭説教に廻ったのが、その当時、私共の、開教師の仕事でしたからね。

AH: ああ、そうですか。

SM: まあ、Wailuku本願寺が、あの区、区で信仰の人が、十人位、その区の人達が、集まって、毎晩、毎晩と言わない、月に一度ですね、あの、お説教をするという集まりをしておりました。だから、夜は、ちょっと、

月の半分位は、区に、お説教に行く、まあ、そういう、家庭説教が、主でしたね。まあ、まだ、若い私が、そのお説教に行くと、参って来るその、member の人達は、まあ、大体、三十、四十、五十の年、まあ、働き盛りの人であったわけですね。

AH: そう、そう、そうですね。

SM: Member がですね。だから、二世の人もおるし、一世の人もおるし、その人達が、あの、区--区で、家を順番に廻って、夜、仕事が済んで、七時半頃、皆が、その宿をする家に集まって、それで、まあ、一緒に、正信偈 [shoshinge] 六首引きを上げ、それから、まあ、開教師が、30分位、ご法話をして、それで後は、世間話をして、お茶を飲んで、というような、家庭の布教が、当時のお寺の開教師の、主な仕事で、、、それで、午後には、そういうふうに、日本語学校の先生をする。まあ、そういうことで、開教師の仕事は。その当時、そういう、その、お寺の仕事以外に、あの領事館の取次人ということで、まあ、あの、死亡通知ですね、それは、沢山ありましたですね。前は、結婚の届けとか、徴兵延期の届けとか、いうものが、あったそうですけども、私が参りました時には、届けるのが、主な仕事で、、、まあ、そういうことで、他に、領事館の仕事としては、取次人の仕事としては、あの、総領事が来られるとか、、、領事が来られるとか、まあ、総領事館から、お客さんがあれば、島に廻って来るのを、それを案内するというようなこと、それから、他に、そういうこと以外には、まあ、何かの、その、日本の戦争後には、日本の難民救済の慰問品を、送るというような時代がありましたから、その手伝いは、Maui 島の全体から、私ら開教師が、主になってですね、あの、仕事したような時代がありましたですね。

AH: ああ、そうでしたか。

SM: まあ、そういうことで、開教師の、当時の、戦争前の、私どもの、した仕事は、午後は日本語学校の先生、夜は布教に廻る、それで、まあ、法務というものは、割合に、まだ、人の死ぬるのも、あまり...

AH: ああ、そうですね。まだ、若い時代ですからね。

SM: ... あまりない時代でしたから、まあ、そういうことで、Maui に、28年おりましたけれども、その間、Wailuku 本願寺に三年、それから、Paia 本願寺に、こんどは、主任として、Paia 本願寺に、まあ、結婚して、子供を一人連れて、1938年に、戦争前ですから、参りまして、そして、その、39年ですね、6、7、8と三年間は、Wailuku 本願寺に おりましたけれども、それから、39年から、Paia 本願寺の主任開教師

として、赴任したわけなので。Paia 本願寺というのは、Paia 耕地の中にあつたお寺ですから、お寺の周りに、150軒位な plantation の member のおる camp があつて、そこが中心で、それで、下 Paia, Hamakuapoko, Kaheka, Grove Ranch, Haliimaile, Makawao, それから、Pukalani, Kula, Ulupalakula いうように、camp が別れておつて、大体、地方の区の member が、150人、Paia camp の member が、150人、300人の member のおるお寺でしたから、お寺としても、充分経営のできるような状態のお寺でした。で、まあ、日本語学校は、あの、私、Paia に替わりまして、Wailuku 本願寺に、何年間か、、、それから、Keahua 日本語学校の先生もして、結局、1941年の12月に、第二世界戦争が勃発したわけですね。それまで、ずっと、Paia 本願寺に駐在して、いろいろと、布教もしておつたわけですね。まあ、大体、Paia のお寺の member が、そういうふうには、camp が沢山別れておりましたので、何処も同じように、、、15箇所位、別れておりましたので、夜、毎晩と言っていいほど、お説教に廻っておつたような時代でした。まあ、あの、一番離れておる所は、Ulupalakua という、Maui での、Haleakala の牧場のある camp が、24, 5 miles 離れておりましたけれども、、、そこが、一番遠い所でしたね。まあ、Kula が、30分位のところですけども、自動車で、30分位、Kula の布教場に行つても、、、そういう、大体、広い区域が、Paia 本願寺の布教区域でありましたね。

AH: で、まあ、あの、その頃は、皆、plantation に働いていますでしょ？朝も昼もね、それでも、夜、そうして、皆がお参りになるということは、やっぱり、何かひとつ支えが、欲しかったのでしょうか？

SM: そうでしょうね。まあ、そういうことは、確かに、私の時代は、もう、ハワイ教団が出来てから、ちょっと50年たつておる時代ですから、だから、馬の時代ではなしに、自動車の時代になって、そして、まあ、自動車で、大体、、、どの寺も自動車を買う、買うておるといふような時代になりましたからね。だから、自動車で、camp と camp 廻つたのですけど、まあ、兎に角、その、一世、まあ、二世でも、30, 40の働き盛りの年になった人で、まだ、その時代ですから、二世の人でも、地方におるような二世の人でも、あまり、教育程度は、学校に行く人は、chance がなかったんですからね。だから、戦争後、GI Bill で、大学に行つて、勉強して、沢山二世で偉い人が、出られましたけれども、あの、私が来た、36年から、戦後の、1950年位までの間の、ハワイの member の状態は、そういうふうで、high school を出た人も、少なかった時代がありますね。だから、私の来た、36年ぐらい、戦前のハワイ教団 member のなかでも、大学を出た人、それから、high school を、地方で出たといふのは、少ない時代でしたからね。だから、私の来た

時に、Wailuku 本願寺の会計をしておられた、Yanagi [柳?]さんという人が、この判事になっておられたですね。それで、まあ、滝谷さんのお父さんが、Kauai 島から、Maui に来られて、そして、まあ、3つの劇場を経営し、それから、appliance の自動車、それから、この、icebox というようなものも、店を持っておられ、で、ソーダ会社の、大きい、ソーダ会社を経営しておられ、たいへん、当時、この、日系としては、あの、活躍しておられた。そういうような、時代でしたね。で、まあ、plantation に仕事をしておる人も、まあ、その、luna くらいまで、それで、まあ、store でも、主な人は、白人の人がおって、その下に、まあ、ようやくまあ、部長級の仕事をするような人が、何人かおられた、、、こういう時代でしたからね。だから、あの、まあ、私、勿論、日本語で教育をし、service をする、それで、参って来る、若い人達も殆ど英語を使うことがなく、日本語で通された時代でしたよね。

AH: そうですね。あの、まあ、先生が、教えられた子供さん、皆、日本語学校ですよ。教えられたなかから、やっぱり、そうして、親達が、自分達が勉強していないから、まあ、子供にというので、あの、子供には、教育を受けさせましたから、偉い方が、沢山出ていらっしやるでしょうね。

SM: そういうことに、なりますよね。はい、はい。

AH: ... 教え子の中からね。

SM: まあ、あの、日本でも、同じこと、その、また、私達の年配の時代は、教育するのにも、なかなか大変な費用がかかるために、親も、苦労したわけですからね。

AM: 先生、その頃、お給料はどのくらいだったんですか？

SM: 私がね...

AH: ... 生活の。

SM: 日本から参りました時にはね、あの日本語学校で、40ドル、お寺のほうから、20ドルで、、、60ドルの月給ということで、参りました。勿論、その、私達がお寺で育って、それで、まあ、あの、お寺の生活を日本で、まあ、朝鮮、台湾で、開教師で仕事しましたけれども、この、なんぼ呉れたから、行くとかいうようなことは、全然考えない。

AH: そうですね。

SM: あの、お布施を貰って、それで、生活をするというような。で、まあ、

あの、私、仏教学院を、、、中央仏教学院を卒業する時に、藤永 [fujinaga] Seitetsu [西哲?] という和上さんの先生が、“君達は、これから、この学院を卒業して、社会に出て、お寺の住職になり、いろいろと、活躍するだろうけれども、まあ、あの、生涯、仏様を大事にしておれば、まあ、ざっくばらんな話で、食べるのには不自由しない。だから、兎に角、これだけは、大切に守れよ” と、こういう、そのことを、はなむけの言葉として頂いたんですけど、だから、給料というようなことに、全然、その、頭のない考え方でしたね。だから、来てから、月給、60ドル貰うことになって、で、まあ、当時の、その、ハワイと、アメリカと日本の関係が、、、30ドル、日本に送れば、日本の100円になって、それが、戦争の前の時代ですね、だから、30ドルのうちで、あの、私ら、60ドル貰って、30ドル日本に送れば、まあ、それが、100円ですからね、だから、少し借金したり、そして、ハワイに来たから、60ドルの月給を貰ったなかから、100円、日本金の100円を何回か送りましたので、急に、まあ、親達には手伝ったことになるわけですね。でも、それは、初めから、そんな100円も、日本金が、送れるからというようなことを、全然、考えなかったわけです。

AH: そう、考えないで、いらしたんですね。

SM: で、まあ、結局、一番考えたのは、50代ですね。50代、、、子供がもう、私は、五人おりますので、五人の子供を抱えて、それで、まあ、家内が、五人の子供を抱えて、その主人である私が死んだ場合に、どうなるかと考えたのが、一番大きな、40-50の年齢の時に、考えましたね。だから、もう、その当時は、social security も無いし、教団の年金の制度も無いし、それで、まあ、死んだら、その、家内は、子供を連れて、親の所に行って世話になるか、なんとかして、まあ、生きていく為には、、、と、いうことで、保険に入るということが、一番考えたことでしたな。それでも、まあ、当時、二万円か、二万五千円かの保険を、毎月少しずつ戦争前から、そして、戦後10年の間に、考えた、私共の家族に対する報酬の考え方でしたね。まあ、今、考えてみると、social security の年金があり、また、教団が年金を出してくれるようになって、まあ、本当に、夢のような状態ですね。

AH: そうですね。

SM: その当時、若い時のことを、考えますとね。

AH: まあ、では、今、あの、やっぱり、若い先生方は、本当に、幸せですね。まあ、来られた時から、いろいろ保証がありますからね。

SM: まあ、そういうこと。はい、はい。保証されていますからね。それは、

日本でも、あの、アメリカでも、同じように、昔と今と、違いますからね。年金制度があり、保証されておるから、その点から考えると、まあ、夢のようですね、本当に、今の時代は、、、思いますとね。

AH: まあ、先生達は、そうして、もう、布教と教育の為に、まあ、一生懸命になっていたんですけど、思いますがね、でも、少しは、何かの楽しみがありましたか？

SM: そうですね。まあ、私達の時の、若い時の、楽しみといえば、まあ、子供を連れて、、、子供を、その、年に一度か二度ですね、summer vacation の間に、子供を連れて海岸に行って、まあ、私は、Maui 島ですから、Lahaina の浄土宗のお寺の裏のほうに、砂浜があって、それで、まあ、beach としては、遊ぶのには大変良い所でしたから、もう、浄土宗のお寺の開教師と、まあ、戦時中、家族同士が一緒でしたから、だから、戦争後も、家族同士の付き合いをして、そうして、まあ、あの、そういうことで、年に何回か、行ったり来たりする chance がありましたね。まあ、そのくらいで、今、その五人の子供育てていく間、あの、夜は、お夕飯を揃って早く食べて、それで、布教に出て、留守、それで、まあ、それ以外に、法務があって、留守をすることがあって、子供達の接触がなかったですね。その点は、子供達に対して、あの、済まないという気がしますね。今、私の子供が、子供二人を育てて、一緒におりますけれども、それで、この、親子の繋がりというものを見ますと、本当に、私達の育った時の、子供の時と、今の、私の三番目の息子が子供と接する時間の長いので、まあ、本当に、まあ、驚く程ですね。まあ、しょっちゅう、子供と出たりしておりますね。

AH: 先生、時代が変わりましたね。まあ、家庭 service をしないと、今の若い奥さん方は、怒ってしまいますけども、昔は、開教師さんの奥さんなんか、まあ、我慢されて、本当に、子供さんの為に、あの、まあ、ご主人の開教師先生は、外においでになって...

SM: 本当、そういうことを思いますね。だから、私がおったお寺が、そういうことで、地方のお寺が、Sunday school をするのに、それで、まあ、一 [hito] Sunday だけは、Paia 本願寺の、Sunday school 、私、受け持っていましたけれども、その後は、Sunday は、家内がお寺の Sunday school を、全部、責任を持ってやっておりましたね。でも、Hamakuapoko、それから、Grove Ranch, Makawao、その三箇所の Sunday school が、ありましたね。それで、Kula という所には、Saturday の日に、午後行って、家内と行って、それで、まあ、その、家内が、二人が、Saturday には出ますから、それで、まあ、留守は、子供らが家におって、それで、昼過ぎ迄、留守をしますから、子供らが、自分らで、お昼は、Saturday の昼は、済ましておりましたですね。そういう

ことで、その点から考えた時に、まあ、開教師の仕事というもの、まあ、いろいろ、苦勞させられることを云いますね。

AH: そうですね。まあ、本当に、昔の、（(bomori?)）さんのお話、聞いてもね、本当に、今とは、違いますね。

SM: それは、違いますですね。だから、子供らが、その五人が、上の子供が、二人が、high school 出て、それで、今度、まあ、あの、私、Aiea の本願寺に、、、Maui に28年おって、替わったんですけども、その時に下の二人の子供は、あの Aiea High School に替わって、そういうことで、3人の子供が、Maui で high school を出るまで、一つの寺に、駐在して、まあ、お世話になったということに、なるわけですよ。で、まあ、下の二人が、Aiea の本願寺に来て、ハワイで、Honolulu で、勉強することが出来ましたので、まあ、その点は、、、私も、小さい時に、子供が、変わると可哀想ということで、出来るだけ替わることをしないように考えて、で、まあ、子供が、大きくなってから、Maui から、Oahu に替わったということですね。

AH: また、ちょっと、後戻りをするようなんですけども、先生、いつか、先生が、一回のお葬式に、皆さんが集まって来た時に、私は、日本語で、まあ、わかっても、わからなくても、お話をする、そしたら、それを聞いてくれた人が、まあ、十人なら十人いれば、そして、そのお葬式が、四回も五回も続けば、50人もの人が、わからなくても、このお説法を聞いてくれる、その喜びでもって、一生懸命にやっているということ、いつか、先生が、おっしゃったと思うんですけども、やっぱり、そういう信念で、今日まで、来られたんでしょうね。

SM: まあ、そうですね。私は、日本で育って、日本で一人前になったということで、民主主義、democracy ということに関しては、考え方が、全然違いましたね。だから、もう、遮二無二、私の考えを通すという、これは、私の、過去においておこなったことで、だから、仏青の人達に、誤解されたこともありますね。で、まあ、あの、一陽、別院に入った時の私が、その、副輪番として、入るということで、藤谷総長が、来いということで、別院に、駐在になったんですけども、その別院に駐在するということは、私の、一つの望みがあったわけですね。それを、その、やり通すという、まあ、考えのもとに、それを、まあ、やったんですけど、それが、別院で、その、葬式をする時に、あの、御文章だけ読んで、お説教はしておらんかったですよね。それを、私、戦争後の時に、当時の副輪番に話して、あれだけの会葬者があるのに、あの、お説教をしないということは、どうかと思うが、まあ、私らは、Maui においても、Maui で葬式があれば、必ず、御文章を読んで、私は、日本語で、日本語のお説教をして、どうせ、来たんですけども、Honolulu では、

あれほどの会葬者があるのにですね、そういうことをしないのは、
言って、もう、話したことがあるんで、それを実行に移すという意味で、あの、
別院の駐在ということですね、なったわけですよ。だから、9月の1日、30日、
31日の日に、別院に行って、9月1日から、勤務するので、
黒板に葬式の割り当てが書いてありましたが、私は、葬式を、自分で
行くように書き換えて、それで、まあ、9月1日の、第一の葬式から、
別院で葬式をした時に、御文章を読んで、それで、まあ、白骨の
御文章をあげて、勿論、日本語ですけども、日本語で、短いご法話を
しました。そうすると、まあ、係の、細井 [Hosoi] 葬儀所の人が、
“開教師、そんな説教なんかしても、なんにもならんぞ” ということを
言うんですね。“なんにもならん言うてからに、その、説教は、短いご法話をするん
だから、あんたらと関係することじゃない。開教師のすることは、今の葬式をす
るのは、私がするんだから、あんたは、何も言わなくても
いい、で、まあ、500人、会葬者があっても、そのうちで、日本語の
わかる人は、それは、三分かもしれない、僅かな人しか、日本語がわからない、
後は、皆、英語の人だと思って、あんたは、どういうことを、
言うんか知らないけども、日本語の話を、私は、日本語しか出来ないん
だから、日本語で話して、その沢山の会葬者の中で、一人でも二人でも、
私のご法話を聞いてくれる人があったら、それで、私は、満足するんだから、私
が、司式するのに、そのことに関して、貴方は、文句はいわぬ“
まあ、こう言って、私は、強く言ったことがあるんで、それからは、
ずっと、そのように通して、それで、まあ、院内の集まりの時に、
開教師達に、私は、こういうふうにするからと言って、まあ、それで、
あの先生達も、それに賛成してくれて、まあ、いまでは、日本語、英語、
まあ、英語が、今、主になったおりますから、英語でご法話をしてもらっておる
ことというわけですね。

まあ、あの、戦争中には、私達、五年近く、intern されて、その間、
いろいろな苦労がありましたけれど、まあ、あの、2、3年前に、
収容所に入れられておった者に対して、アメリカ政府は、二万ドルの
補償金をくれ、で、まあ、収容所で生まれた子供も貰っておるような
状態ですね。そうして、まあ、大統領から、それは政府として、
アメリカ政府として、間違っただという手紙を頂くというようなことですね。まあ、
考えてみると、たいへん当時は、いろいろと、苦しいこともありましたけ
れども、今、考えてみれば、たいへん有り難いことであ
ったと、感謝しておりますね。

AH: まあ、そういう点からいくと、やはり、アメリカというお国は、心が
広いんでしょうね。

SM: ああ、まあ、そういうことも、確かに言えるでしょうね、はい。

AH: まあ、先生も、日本で生まれになったとは、言いながら、もう、在米、何十年にもなりますね。

SM: はい、そう、だから...

AH: どうしても、ここが、第二のふるさとですね。

SM: はい、そうです。もう、だから、20年位前に、帰化しまして、そうして、アメリカ市民として、今、本当に考えもしなかった平和な、恵まれた環境のなかに、余生を送ることが出来ておるということを、本当に、有り難く、感謝しておりますですね。

AH: そうですね。私も、そう、思います。まあ、あの、最近、先生は、奥様をお亡くしになりましたけども、お寂しいと思いますが、引退なさって、毎日、どういうように、お過ごしですか？

SM: はい、私は、まあ、今年の3月に、56年一緒におりました家内が、79歳で、ちょっと、まあ、二年位が、本当の病気の苦しみを味わいながら、一緒に生活をして、そうして、今、一人になって、いろいろと、夜（(tsuruuto?)）、寝たと思えば、目が覚めて、それで、まあ、寝付かれない時がありますので、それで、その時に、思うのは、過ぎ去った81年の、人生のいろいろなことを思い起こして、ああいうこともあった、こういうこともあったと、こういうふうに、昔のことが、懐かしく思われるんですが、まあ、その、私も、あんまり口下手で、上手に話すことも出来ないし、家内も、あんまり、ベチャベチャ言うような女でなかったの、家庭的なことでも、あまり細かいことは、話合ったことがなかったわけですね。それで、生きておる間は、別に、ああじゃこうじゃというようなことも言わずに、それで、まあ、“オイ”と呼べば、“ハイ”と返事をするくらいな程度でしたから、でも、今は、“オイ”と呼んでも、“ハイ”と返事をしてくれる人がいませんで、たいへん寂しく感ずるのでありまするが、まあ、人間として、いろいろと、人生苦のなかに生きて行かなければならない私共であることを、今まで話をし、思ってもおりましたけれども、本当に一人になって、始めて、そのいろいろな苦しみの中から、生きて行かなければならないということですね。しみじみ思っ、一日、一日を送っておりますが、まあ、golf も、gate ball も、この頃は、一時休んで、私のする、毎日の、30分か一時間の外に出て、自然と一緒に暮らすというのが、私の今の楽しみです。で、まあ、大体、Pearl City の僅かな土地の中に、私は、芋を植えて、それを育てるのが、楽しみなんです。まあ、あの、沢山、今年は、出来ましたけれども、土を掘って、ゴミを入れて、で、まあ、大体、その、一尺かそこらしか土の深さはないけれども、そのゴミを入れて、まあ、育てて、芋が大きくなって、（(izen?)）半年でも、

掘れますからね、それが、私の、今の毎日の楽しみとして、暮らしております。

AH: あの、私達が、奥様をが亡くなられて、本当に、先生が、どのように毎日をお過ごしかと、まあ、ちょっとね、あの、他所事ながら、あの、懸念しておりましたけれども、いつも、先生が、清潔な感じで、そして、土に親しみ、まあ、家族とご一緒に、仲良く暮らしていらっしゃるのを見て、まあ、ちょっと、安心しているですよ。まあ、これから、ちょっと、golf をなさったり、お相撲を見られたりして、enjoy して下さい。

SM: はい、はい、有難うあります。

AH: 先生、最後に、これからの、若い開教師先生方に、何か、後輩に、望まれることが、ありますか？

SM: そうですね、、、

AH: 先生が、Maui にいらした頃ね、いろんな、白人もおりましたし、Hawaiian もいたでしょ、いろいろな人種がいた中の、で、まあ、本願寺の僧侶として、また、宗教家としてですね、あの、いろいろな、なにか、難しい問題がありましたか？

SM: そうですね。ま、私が、戦前に来た時には、開教師として、このハワイの社会は、一応、その、尊敬というような意味で、扱ってくれておりましたので、それで、まあ、全然、その、あまり、他の宗教に対することなんかも、あの、まあ、私自身の、性格もありますけれども、悪く言うようなことはなく、あの、一緒に、仕事をして行くというような考えでしたから、まあ、Maui 島あたりでも、仏教のお寺、臨済宗のお寺も、ありましたし、曹洞宗のお寺も、下 Paia にあって、まあ、曹洞宗の開教師とも、一緒に、まあ、宗教的な行事で、一緒にやるというようなことは、花祭くらい、ちょうど、良いくらいの時ですけども、それ以外には、一緒に遊ぶことも、golf を一緒に遊んだこともありますし、まあ、いろいろ、あの、社会的なことで、話合ったことも、ありますが、他の宗教に対して、私は、あまり、、、Paia あたりは、Christian の教えの教会もありましたけれども、Christian の牧師さんとも、時に会って、Hello と言って、挨拶をするくらい。まあ、そういうことは、何時も、区別することなく、付き合っておりましたですね。それで、まあ、Paia Camp あたりは、殆ど、日本人 camp ですからね、多少、Philippine の人なんかが、おりましたけれども、その人達も、お寺に対しての感じは、好意的でしたからね、だから、Maui から Aiea に出て、その時に、Philippine の人が、“You は minister, eh?” それで、“Maui におった、eh?” というようなことを言って、話しかけてきたことも、何人かおりましたですね。そ

れで、まあ、それらが、盆踊りに来て、それで、まあ、盆踊りの時に、お寺へ来て、そして、お寺で、いろんな物を買って、食べて、そうした記憶があって、そして、まあ、顔を見て、覚えておって、懐かしく思って話しかけてきたんだろうと思いますかね。まあ、いちばん、あの印象に残っておることでは、あの、開教師になって、それで、まあ、自動車を使って、camp の中を、あの、巡査で、カナカ系の、まあ、土人系の、巡査が、まあ、“Hello, minister” 言うて、向こうが手をあげてね、挨拶をされたことを、今でも、懐かしく思い出しますけれども、で、まあ、兎に角、ハワイに来て、もう、日本人の人種の中に住んで、まあ、殆ど、日本と変わらない生活をです、しましたので、で、まあ、そういうことで、他の宗教に対しても、それから、他の宗派に対しても、仏教徒の人に対しても、私は、あまり、その、変った考え方ではない、同じような member であるというようなことで、接してきましたけどね。

AH: あの、いま、先生の、もう、ご存知のように、あの、Dana [charity or giving?] の人というのが、ありますよね。

SM: はい。

AH: あれは、まあ、世界 ((fujin?))、世界大会で、決まったことで、まあ、今から、何年前ですか、もう、20何年も前から、Dana が、制定されて、で、そのお金は、まあ、社会的に、あの、奉仕していますが、昔は、そういうことは、なかったんですか？

SM: そうですね、もう、殆ど、そういうことはなかったですね。ただ、日本に対するですね、あの、何かの援助は、盛んにやっておりましたね。あの、満州事件の金とか、また、今年も、東京の大震災の時の、何年かの記念にあたっておるので、もう、まあ、そういう、日本の災害に対する援助は、直ぐにやっておりましたね。で、まあ、戦後、いちばん、お金も品物も、盛んに集めて、援助したのは、たいへんな、大きな仕事でしたですね。それは、Maui なんかも、あの、宗教界全体が、一緒になって、member の人達と、一緒に、同じように仕事したですね。そのようなことは、ありましてけれども、あまり、外人、他の人種に対することに関しては、まあまあ、あまり、日本と変わらないと言ってええぐらいですね。日本人の人達が、主でしたからね、camp の生活は。

AH: まあ、ちょっと、あの、先生、前後しますけどね、昔、あの、よく、あの、著名な方達が、あの、沢山来たと思うんですね、文化人とか、芸能人とか、それから、まあ、有名な政治家とかね、そして、まあ、ちょっと、一昔前、今のような娯楽も無かったですし、大きな hall も無かったでしょうから、大抵、本願寺へ、皆、集まったりしましたが、そのなかで、誰か出会われた人で、何か、こう、印象に残った人が、

あります？

SM: そうですね、あの、1950年位、戦争が済んで、4、5年経った時に、日本から、名士が、周遊に沢山来られる時代になりまして、それでまあ、日本から来られたら、必ず、あの、島を廻られるということが、なんですからね。島に廻って来られると、まあ、いちばん、Wailuku が中心ですけども、Maui あたりですと、Haleakala という山がありまするので、Haleakala に案内するということが、あの、ひとつの大事なことですから、まあ、私が、あの、Haleakala に、まあ、近いところでしたから、あの山に近いですからね、それで、まあ、山まで案内したことが何回もありますけれども、いちばん印象に残っておるのは、花山 [Hanayama] 信勝 [Shinsho] 先生ですね。

AH: ああ、そうですか。ちょっと、先生のお話を聞かせて下さい。

SM: まあ、そうですね。まあ、先生と、その、話したからこと言うては、それほど、あの、残ってはおりませんけれども、Haleakala に案内をして、そして、まあ、あの Haleakala という山に登るということが、戦前の、今から、60年位前の人間として、高い所にですね、登るということは、なかなか困難な時代だったわけですよ。それで、まあ、今は、飛行機の上から、一万尺の上から、あの、朝日を見ることが出来るけれども、一万尺の上まで登るということは、なかなか、容易なことではないわけですよ。それが、その、自動車で、僅かな、二時間位な時間でしたから、上に登って、そして、朝日を見ることが出来るようになったのは、その、自動車の道がついたわけですよ。それが、1935年に、Haleakala の頂上まで、途中まで行っていた道が、あの、貫通したわけですから。それで、まあ、坂本さんという二世の請負師が、請け負って、その、Haleakala の頂上へ道を作ったんですけどもね。で、まあ、戦後、花山信勝先生が、戦争戦犯の方々の教誨師を勤めておられたというようなことで、まあ、その、戦後來られて、それで、まあ、一応、その、各寺を廻られたお話をされたようなことがあって、その時のことを、私は、あまり、覚えてはおりませんけれども、Haleakala に案内をして、それで、朝日の昇る状態を、雲の上でですね、あの、刻一刻、その、お日さんが昇って行く、あの、光景を、先生が見て、感じられた、もう、大きな声で、両手揚げて、バンザイと言われたことをですね、あの、はっきり、今、覚えておりますけれどもね、まあ、そういうことで、沢山な、いろんな、布教師とか、日本の有名な方が、来られたら、Maui では、私が案内して、Haleakala に登ってということですよ。

AH: あの、昔は、あの、まあ、料亭なんかも、ありました？

SM: はい、いや。

AH: そういうところにも、ご案内することもありました？

SM: Maui ではですね、そういう、その、Hotel も、ひとつ Wailuku にありましたけれども、そういう Hotel に泊めるということはしないで、まあ、私達は、自分のお寺に、客間が、粗末なものでありましたけれども、ありましたので、その、客間へ泊めるということで、それで、まあ、restaurant というものも、Wailuku に、一箇所か二箇所、ありましたけれども、これは、まあ、粗末なものですから、だから、家でですね、接待をするというのが、もう、これは、ふさわしいですね。

AH: 最高のね、おもてなしでしょうね。

SM: それより他に、どうすることも、出来ないわけなんです。だから、家でですね、あの、お食事を、お夕飯を、、、まあ、いちばん忘れられないことは、あの、今の食べる物を作ることですよね。それで、まあ、戦後、1950年位から、お客さんが来られるようになって、十年間位は、まあ、64年迄、私、Maui におりましたから、その間で、忘れられないことは、兎に角、お客さんの御接待には、chicken hekka をして、お夕飯を一緒食べたということですよね。まあ、あの、その頃の、chicken というものは、なかなか、今、此処らで、market で売っている chicken の味と違って、味がしておって、それで、今頃、chicken hekka をしても、それほど、昔の味が出ないけれども、その当時、Maui では、chicken hekka で接待をするより他に、方法が無いんですからね、だから、chicken も、私は、裏のほうに、飼っておりまして、それで、まあ、chicken を殺すのに、あの、男の人が、皆、仕事に行きますので、帰って来る、四時半、五時を待つといたんでは間に合わないというので、それで、私は、よう殺さないから、だから、お寺に来る、一人のご婦人の方が、“南無阿弥陀仏 [Namuamidabu]、南無阿弥陀仏”お念仏を唱えながら、chicken の首を切ったことはね、今でも、思い出します。という、まあ、たいへん懐かしい思い出ですけども、これよりほかに、方法が無かったから、仕方なくね、そういうことで、まあ、間に合わしておったということが、ありますね。

AH: 本当に、私達が、やっぱり、そういうものの命を頂いて、今まで、暮らして来たんですけども、、、

SM: はい、はい。

AH: まあ、先生、今日は、本当に、昔の貴重なお話、有難う御座いました。あの、先生と私の主人がね、大体、同じ位ですから、私、その当時の、お話、そんなに聞いていませんからね、だから、今、先生のお話を

聞いて、大体なことが、判ったんですけれども、まあ、これからも、まあ、あの、これからはね、あの、長寿が出来る時代になりましたから、お体を大切になさって、何時迄も、私達の為に、昔の良いお話を、聞かせて頂きたいですが、まあ、どうぞ、元気でいて下さい。

SM: はい、有難う御座います。

AH: 今日、本当に、良いお話を、有難う御座いました。

SM: いいえ、粗末なことでした。ごめんなさい。